

<ごあいさつ>

発足5周年に寄せて



IAUDは2002年横浜での国際会議を契機に発足し、さまざまな活動に取り組んできました。発足に向けた動きや京都での国際会議開催など、大きな節目において総裁である寛仁親王殿下から賜ったお言葉が、その活動の強い推進力となったことを忘れてはなりません。

しかしながら、2003年の発足から今年の11月で、多くの貴重な成果とともに無事5周年を迎えられましたことは、何よりも会員の皆さまの絶大なるご支援、日々の取り組みの積み重ねの賜物であり、ご尽力いただいた皆さま方にこの場をお借りしまして、心より感謝申し上げます。

昨今、世界情勢はかつて経験したことのない規模とスピードで不安材料が広がっていますが、その難題解決のため今ほど国や地域を超えて力を合わせる事が重要となっている時はありません。ユニヴァーサルデザインの、人を中心においた考え方や取り組みスタンス、そこから生み出される成果は、環境への取り組みと同様、皆が平和で快適に暮らせるサステナブル社会実現のための大きなカギを握っているといえます。

2010年には第3回目の国際会議が控えており、IAUDも今後は活動の場を国内にとどめずアジアから全世界に広げ、日本のアイデンティティの一つとして、世界の人々の暮らしをより豊かなものにするため貢献してゆくことが強く求められています。

IAUD会員の皆さまに改めて深く感謝申しあげ、今後のご発展を期待し、ご健勝をお祈りして5周年のあいさつとさせていただきます。

2008年11月

IAUD 会長

山本 卓真

<ごあいさつ> 発足5周年に寄せて

IAUD会長 山本卓眞

1. 特集：生活者の視点で考える (4) ～AJU自立の家に聞くUD～ 2
2. UD家具へのチャレンジ！～日本の生活様式、高齢者に配慮した静岡家具の取り組み～ . . . 8
3. Case study: まちづくりプロジェクト 12
4. 世界のUD動向：バルセロナ・デザイン・ウィーク参加報告ほか 17

特集：生活者の視点で考える(4) ～「AJU 自立の家」に聞くUD～



今回は「楽しくなければ福祉じゃない！」を合言葉に、名古屋で35年間にわたり障害者自身が中心になり運営するという今までにない新しい福祉の試みにチャレンジされている「AJU自立の家」の福祉ホームサマリアハウスを訪問しお話をうかがいました。

基本理念として①持てる機能を活かす場、②暮らしの拠点としての場 ③地域社会、仲間との交流の場という3つの場を同時に実現しようという取り組みで、中部国際空港セントレアや2005年の愛・地球博（愛知万博）ではユニバーサルデザイン対応のコンサルテーションも担当されるなど、他に類のないユニークな活動を展開されています。設立当時から中心となって活動してこられた専務理事の山田昭義氏は、ご自身も頸椎損傷により車いすで生活されています。ちなみに「AJU」は何か横文字の略称かと思いきや「愛の実行運動」の頭文字、多くの苦難もあるけれど、自ら楽しみながら取り組んでいこうという、設立主旨の一端がその名称からもうかがえます。

日時：2008年10月30日 13:30～

場所：社会福祉法人AJU自立の家 福祉ホームサマリアハウス（名古屋市）

ゲスト：山田昭義氏 社会福祉法人AJU自立の家（IAUD準会員）専務理事
水谷 真氏 社会福祉法人AJU自立の家 わだちコンピュータハウス所長

聞き手：成川匡文 IAUD 副理事長／情報交流センター所長
川原啓嗣 IAUD 専務理事／情報交流センター副所長
蔦谷邦夫 IAUD 情報交流センター

成川： 話のきっかけとして「AJU 自立の家」設立の経緯あたりからお聞かせいただけますか？



山田： 理屈をつければテーマは「障害者の自立」ということですが、とにかく自分が楽しく生活したいだけ、生きていきたいだけで、団体を作った目的も外へ出て楽しく遊びたいからというのが本音でした。ところが外へ出てみると街は段差だらけだし、トイレはないしバリアばかりで、まずは素材をつくろうという運動に即、切り替わっていきました。1973年（昭和48年）のことですが、皆さんの言葉を使えば福祉のまちづくり運動から始まった訳です。その年、それ以来35年間非常にお世話になる3人の方に出会った。

一人は朝日新聞の厚生文化事業部の方で、何か話をもっていくとお金の心配はいらなから、もっとしっかり企画をつくりなさいと、われわれ20人に満たない小さな団体でしたが全面的に応援してくれた。車いすの集会や電動車いすの試乗会をやったり、街に出かけたりカヌーやヨットに乗ったりスキーをしたりと、皆さんがやる楽しそうなことを何でもやりたいということで取り組んでいった。

もう一人は福祉大学の児島美都子先生、福祉の勉強を昨年まで33年間、毎月1回、学習ボランティアということで、勉強（学習）と昼から皆で遊びに行くという実践を30数年繰り返してきて皆が外へ出るという成果につながった。

3人目が寛仁親王殿下で、同じ年の12月にユニークダンス（ソーシャルダンス）の会で初めてお目にかかった。私たちにはもともと高邁な理論があった訳ではなく、まちづくりといっても拳をあげるというのではなく自分がどうすれば楽しめるかということをもとに進めてきた。この施設もわれわれが考えたことではなかった。殿下から仙台でこんな面白いものをつくるから名古屋もやるなら手伝ってあげるがどうかという電話で「障害者の下宿屋」だぞということでした。私は1968年（昭和43年）から3年間、約1,000日間施設にいたが毎日30分と変わらない生活の繰り返しで、当時の仲間と今に同じ施設でリハビリをつづけているものもある。自由もプライバシーもないそんな施設はいらなと思ったが、「下宿屋」というのはとても魅力的で、施設のそういうところを全てとっばらった感じがした。

それでみんな面白がって、仙台の後に2番目に作る名古屋では「下宿屋」だけでなく、家にいる人をここへ連れ出し、やがては社会で自立という一貫した場を全部やろうということで、それから約4年間、毎月2回、約3時間の勉強会を続けて理念を組み立ててい



た。自分の城は自分で作ろうよということでやってきたが、一人の突出した意見でここができたのではなくて皆の議論を積み重ねてできたというのは自慢できること。今思うとその4年間の記録をきちんととっていけば素晴らしい本になったと思うが、みんな楽しみながらやってきたし、僕は過去を全部捨てていっちゃう人なので何も残っていない。（笑）

成川： サラリーマンの仕事でもそうですが、一番面白い事やったというのって、なぜか記録が残ってないんですよね。

山田： 研究とかそういうことでなく、自分が生きがいを感じてできるということが一番大事で、それを見つけた人は目が輝いてくる訳です。そういうことでわれわれは最初からいわゆる「施設」という発想はまったく無しにやってきた。去年の4月に自立支援法というのができて、その理念だけはわれわれが18年前にやり始めたことをやっとな国が法律で認めたということです。

川原： 法律に関しては米国の ADA と比べ、日本はまだまだだという話を聞きますが、そのあたりはどう思われますか。

山田： アメリカが全て良いとは思わない。もちろんアメリカにも良いところはたくさんあるが、スクラップ・アンド・ビルドが顕著で、夢をはぐくみ易い地域ではあるが、すぐになくなってしまおうという側面もある。日本の目指す方向は基本的にはやはり北欧型なのではないだろうか。どんなに重い障害があってもそれなりに当たり前のように生きていける、そのうえで夢が持てるという社会が理想。



川原： 日本も 70 年代、北欧型をモデルにして研究した時期がありました。高福祉社会はそれだけ負担も大きく財政が破綻した国があったりして、日本はそれほど負担も大きくないけれど福祉も中程度というところで落ち着いた感じですね。

山田： 福祉以外の社会的活動ということでは「わだちコンピュータハウス」が 1993 年ころからコンサルタント業を始めた。都市計画などのコンサルタントはたくさんあるが、福祉の視点で障害者が自ら運営するという点では全国で初めてだったと思います。まちづくりのコンサルティングについてはまちづくり条例ができた 1995 年の翌年あたりからですね。それから愛知県のあちこちでまちづくりの計画をつくった実績もあって中部国際空港の話になる訳です。

万博については専門家のなかでも反対する意見が強くてなかなか進まなかったが、中部国際空港については小牧空港ではだめだということで容認する空気があったので、1999 年ころから営業活動をはじめた。しかし、やっていることは認めるが、なぜ AJU なのか説明がつかないから最初のころはボランティアでやれというようなちょっとおかしな話もありました。

AJU の良いところは視覚や聴覚だけでなくありとあらゆる障害者を現場に連れて来られることで、セントレアでは私自身も 5、60 回行きましたが、述べにすると 1 千 5～6 百人の声を聞いています。基本設計の最初の集まりでは、それぞれの障害の人から相反する意見がたくさん出てきて、会合の後、担当の方があわてて飛んで来られて期間内にまとめるのか心配されていましたが、議論するなかでまずはお互いの障害を理解することが大切なので、譲るところは譲るし妥協していくので任せてください、というようなやり取りがありました。

また、障害者自身が空港というものをあまり数を知らないということがあり、われわれもビジネスだけが目的ではなく、できるだけいいものを作ろうということで、知らないことには議論に参加できませんから、コンサルタント料のなかから費用を負担して、シンガポール空港とかインチョン空港、香港などへ出かけて現場を見に行きました。

川原： 点字ブロックが異なる障害者の間でニーズが対立することなどは良く知られていますが、発着表示など情報の関係でも、あそこまで変更を認めさせたというのは、かなり食い下がられたのではないかと思うのですがいかがでしたか？

山田： ピクトグラムなどトイレくらいは分かるけれどお年寄りには良く分からない。なるべく汎用性の高い国際基準を中心に使っていこうということにした。半年で基本設計についてまとめるということでしたが、すでに仕様変更できないところもあり、もう少し早い時期から入っていれば、障害者の声をもっとしっかり反映できたと思います。また、空港そのものはユニヴァーサルデザインをパーフェクトにやるが、管理棟については特定の人を使うからというので、管理棟といえども今後、障害者雇用などへの対応もありどんな人でも

利用できなければおかしいが、次はちゃんとやろうねということで、障害者が使えるトイレを各フロア1か所にするなど最終的には妥協してしまっただころもある。

川原： 少し立ち入った質問になりますが、差し支えなければコンサルタント・フィーというのはどれくらいの規模だったのでしょうか？

山田： 2001年から2003年の3か年に対して年間平均1,300万円余でした。国土交通省から来られていた担当の課長さんが大変問題意識をもっておられて、AJUとの直接契約ということでそれも初めてのことでした。

成川： いろいろご苦勞もあったとは思いますが、出した方もえらいですね。(笑)
それでは、愛・地球博(愛知万博)の話もお伺いしたいのですが、そのあたりは水谷さんにお聞きしましょうか。

水谷： 万博は空港から1年ほど遅れて始まりました。きっかけはやはり殿下につくっていただいたのですが、取り組みの内容は基本的な多くのアイデアは空港で検討されたものをそのまま万博にもあてはめました。予算や期間が限られていることや環境への配慮から地形の改変が許されないなどの制約を予め了解しあつたうえで、すべてハードで解決するのではなく、人的なサポートでカバーしようというような申し合わせで始めました。



山田が理念として考えたことは、せっかくAJUがやるのなら、これまで寝たきりで外出できなかったような人が万博をきっかけに安心して外へ出られるようなものにしようということでした。ボランティアやスタッフの研修には殿下にも現場にお越しいただき「さりげないおもてなし」というキーワードもいただきました。障害のある方も特別扱いするのではなく一般の人と変わらず快適に、さりげなくもてなすという心を教えていただきました。

山田： ソフトをどのように作っていかうかということでは、ほとんどの人が障害者に接したことがなかったので、「さりげないおもてなし」をしようにもさまざまな障害をまずは知らなければできないだろうということで、実際にさまざまな障害を持った人を実際に連れて行って体験してもらうことから研修をスタートしました。

川原： 教育プログラムということではマニュアル化というところまでいったのでしょうか？

水谷： 私たちが目指したのはテキストを作って終わりということではなく、例えば実際に研修で言語障害の方が来たとき、頭で分かっているだけじゃなく、しっかり当事者に向き合っで対応することを学んでくださいということなんです。成果品としてマニュアルやビデオを作っておしまいということが多いのですが、障害は一人一人違うので実際に接することがまず大切だということです。

成川： 川原さんがおっしゃったのは、そういうところで得られたことをそれだけで終わらせるのはもったいない、ということだと思のですが、実際には確かに難しいところがあるのでしょうかね。例えば私の関わっている電力会社でも各所でお客様との接点があるのですが、マニュアルだけではだめということ現場でも気がついていて、オール電化の料理教室などに当事者の方に来ていただき、実際に体験していただくとうまく分かるということがあります。

山田： 他の施設では、施設長がマニュアルなどで見学者に説明するところが多いのですが、AJUではそれも障害者の利用者本人が当番で行うことにしている。変な話ですが、例えば学校の方が来られると菓子折りをよくいただくけれど、障害者が自ら運営しているということでは、本人にその分を謝礼として（お金で）いただく方がありがたいのですが、なかなかそういう発想はしていただけないですね、菓子折りばかりではメタボになってしまいます。(笑)何を伝えれば良いかというのは当事者が一番良く分かっている訳ですからね。

水谷： テキストは基本的なことは伝えてくれますが、最終的にはニーズは一人一人違うのでその人が何をやりたいのか、一人一人の声に耳を傾けて欲しいですね。

山田： それでピア・カウンセリングが大切ということで取り組んできましたが、例えば病院でも障害を背負った患者がどういう心理状態になっているかということは以外に分かってなくて、同じ障害をかかえた人がこうだよと言ってあげることで、はじめて障害を受け入れる気持ちになれるということがあります。

川原： 数や市場の論理ではなく個別にケアしていくというのはとても大切なことで、理想的には一人一人の例を全て集めて1億2千万のケースを作ればいいのですが、そういう訳にもいかないジレンマというのがあり、そのジレンマをどのようなやり方で解決していくのか、大変難しい問題ですね。

山田： この人（水谷氏）は心理学が専門ですが、今彼が一番力を入れてやっていることは、災害時の避難所のユニバーサル化と、避難の際に援護が必要な人のための支援の体系化ということです。

水谷： GIS（地理情報システム）を活用した避難支援システムで、逃げたくても逃げられないという健常者とは違った困難を抱えた人のための避難誘導を支援するシステムです。また、避難所のユニバーサル化ということでは、例えば避難所で簡単な間仕切りがあれば着替えをするにも人前で裸になるという心理的なストレスを軽くできるなど、心のケアも考慮した支援プロジェクトです。

山田： 例えば災害の際、われわれは現場へ行っておじいさんやおばあさんの話をまず聞いて来いということをやっているのですが、そうでないと水に濡れて汚れてしまったおばあちゃんの大切な思い出の写真を、ボランティアの人がこれはゴミだと勝手に判断して捨ててしまうというようなことが起こってくる訳です。ご主人が寝たきりで水が上がってきたら逃げられないので、いっしょに死のうねと覚悟を決めていたご夫婦が、その後、奥さんがご主人のためだけではなく地域のボランティアとして活動され、夫婦のきずなも深まっていく感動的な話もあります。しかし、災害時の支援というのが言葉としては次第に市民権を得てきてはいますが、個人情報の保護という問題で行政が手を出せないということもあるし、災害にあった人というのはそんなに数が多くないので、いろいろ難しいところもありますが、要援護者を心のケアも含めてサポートするシステムをしっかりと確立しようということに皆で取り組んでいます。

成川： IAUD がやっている活動と比較すると、まさに最前線という感じですね、IAUDもこういうところでも役立っていかねばいけないと思います。会員は企業が多いけれども、作り手の論理だけではだめというのは気づいていますが、なかなかそこから抜けきれないところがあるのではないのでしょうか。



山田： しかし、企業がやっていることも大事で、安く提供するということは企業の力が無いとできない。大切なのはそういう当事者の声を聞く仕組みがあるということで、そうしないと高くてわれわれ手が出せないものになってしまう。その辺の企業のありようも企業の強さということだと思います。

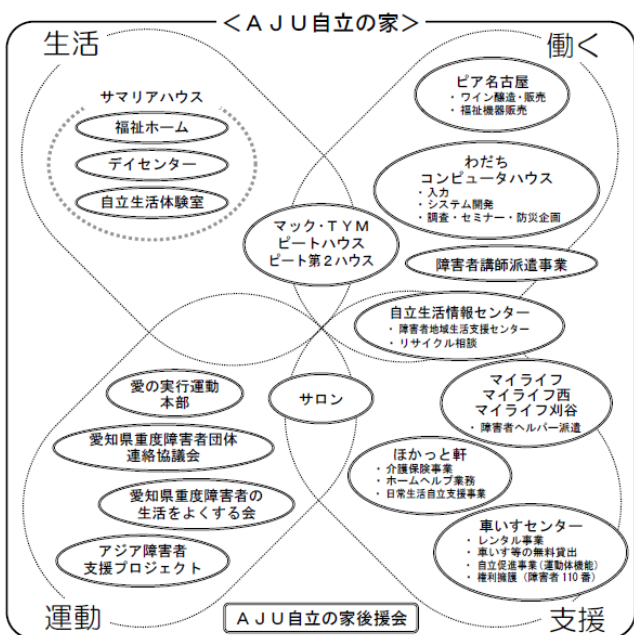
成川： 企業のなかでも UD が次第に市民権を得てきていますし、それまで言葉も知らなかったような経営層でも一旦認知されてくれば推進力はついてきます。そういったことがきっかけで IAUD がエンジン役となって進んでいけば良いと思っています。

川原： IAUD の良いところはそういうことに気づいた企業が、良い事例を出してくれることで、中堅クラスや規模の小さな会社でも右にならえで、底上げができていくところですね。来年2月の UD 大会などの場も活用していろんな人に入ってもらって、ユーザーとの接点の場をどんどん広げていかなければいけない、そのことでお互いに気づくことや理解が深まっていくということですね。

山田： 国や行政の仕組みもそうあるといいと思いますが、なかなかそこまではいかないですね。ものをつくるにはある一定の割合で UD などに予算をつけなければいけないというような雰囲気が出てこないといけない。企業だと経営者の考え方に左右されてしまうのでは困る。空港でいえば建築設計事務所にかかった1%でもと思うのですが、今回はたまたま関わった人に問題意識があったから良かったものの、そこから広がっていかないですからね。また、これからはハードではなくソフトをどうしていくかということです。公営住宅にしてもハードより高齢化で起こってくる問題をどう解決していくかというようなソフトが重要で、そのためにはともに考えていくコミュニティとの関係も大切になってきます。

成川： そういうことでは企業にとっても面と向かったコミュニケーションが大事で、よく「直接デッドボールを投げてください」という言い方をしますが、最後に企業に対してご要望などありましたらお願いします。

山田： 最初に「楽しくなければ福祉じゃない」といいましたが、受ける側も楽しく受けていただかないと、双方が辛いだけになってしまうので、お互いに楽しくやっていきたいですね。



最近、「セルフ・アドボカシー」すなわち、自分にとって何が必要か、どうすればよりよい生活ができるかを自ら考え判断し、それを得るために責任を持って行動してゆく、という考え方がいわれてきました。生活者の視点で考えるという時、多様なユーザーと地域社会との関わりのなかで共に考えながらつくりあげていく姿勢が問われています。今回のインタビューではUDのあり方や考え方のより所となるたくさんのヒントをいただきました。(K. T.)

UD家具へのチャレンジ！

～日本の生活様式、高齢者に配慮した静岡家具の取り組み～

起立木工株式会社 取締役営業部長
佐藤公昭 2008年11月

■はじめに

起立木工株式会社は、家具の産地である静岡県に本社を置き、企画開発から設計、製造、販売まで一貫して行う総合家具メーカーです。

「人と自然」をテーマに「健康と環境」「ユニバーサルデザイン」を考慮した「人にやさしい家具」と「快適な住空間の創造」へ積極的に取り組んでいます。

このたび、静岡県工業技術研究所との共同研究により開発したユニバーサルデザインを取り入れた家具について報告します。

■日常の生活にじっくり馴染みながら、心・体に優しい家具を提案します。

お年寄りや体の不自由な方にもやさしく、安心して使うことができるユニバーサルデザイン家具を開発し、製造・販売しています。



◇座って実感！

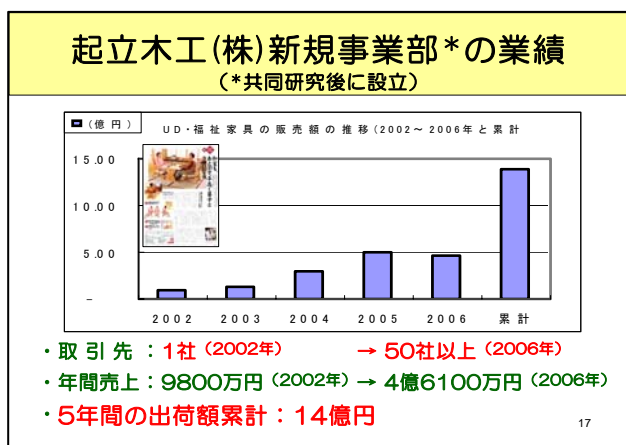
日本人から和室の生活は切り離せないものです。しかし、あぐらや正座の状態では立ち座りを行うのは、足腰に負担が掛かってしまいます。そんな悩みは、このチェアが楽々解消してくれます。

その秘密は……座椅子より高く、ダイニングチェアより低い座面の高さ！だから体に優しいのです。

■ユニバーサルデザイン家具は、こうして生まれました。

何がきっかけになるか分からないものです。ある日、私が出席していたとき、膝の悪い祖母がとても大変そうに座っている様子を見て、何とかならないものかと思いました。そんな折、静岡県工業技術研究所主催の「人間中心設計講習会」に参加し、「これだ！」と思いました。その後、同研究所と共同研究契約を結び、「和室で使用するダイニングセットの開発」に着手したのです。これが、私にとって、初めてのユニバーサルデザインとの出会いでした。

■企業内ベンチャーを立上げ、累計出荷額は14億円に！

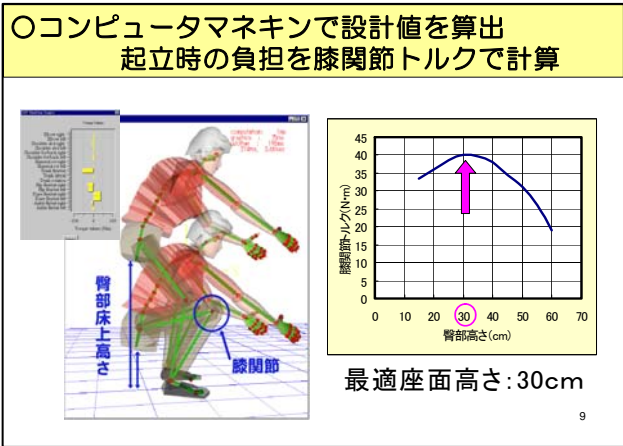


ユニバーサルデザイン家具の開発により、従来の家具市場だけでなく、福祉、医療施設等の新規分野にも参入できました。それにより、社内において、企業内ベンチャー「新規事業部」を立ち上げました。

新規事業部の5年間(2007年3月まで)の累計出荷額は14億円にもなっています。

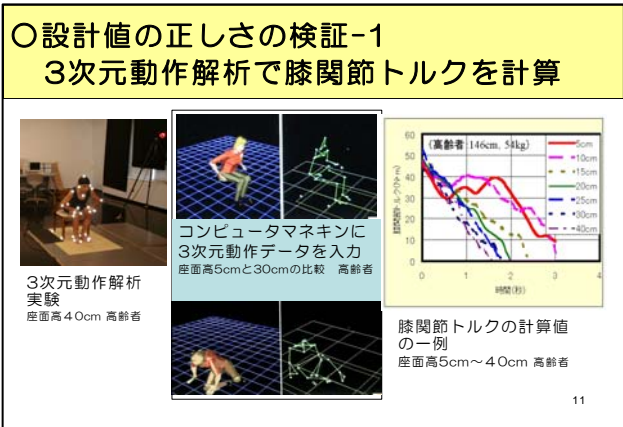
■ユニバーサルデザイン家具の共同研究開発

ユニバーサルデザイン家具の研究開発は、静岡県プロジェクト研究「UDのためのモノ作りシステムの開発」の実用化研究として行われました。研究の概要は以下のとおりです。



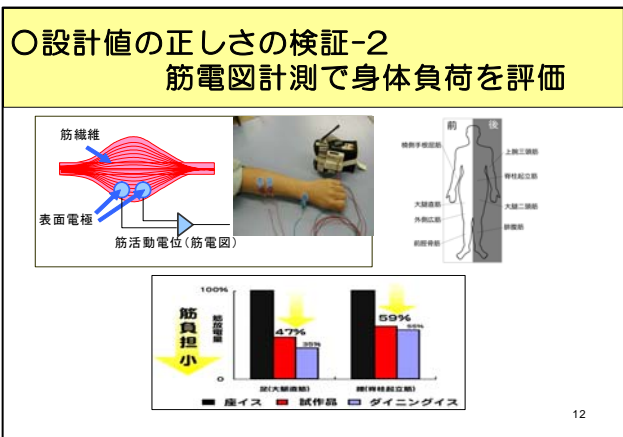
【仮説】

高齢者が立ち上がりやすい製品を作るには、若年者と高齢者の立ち上がりの動作を計測し、製品の設計評価に生かす技術が必要となります。そこで、コンピュータマネキン(コンピュータ上に作成された仮想的な人体モデル)を用いて、膝関節トルク(膝にかかる負荷)を算出し、座面高を 30cm 以上に設定することで、立ち上がり動作の膝の負担が軽減できるという仮説を立てました。



【仮説の検証】

人間の動作を3次元的に計測・解析ができる3次元動作解析装置と、コンピュータ上の仮想的な人体モデル(コンピュータマネキン)を用いて、異なる座面高さからの立ち上がり動作の解析と、膝関節トルクの算出を行いました。立ち上がり動作の測定終了後には、身体負荷の主観評価も行いました。



【検証の結果】

主観評価の結果、座面高が 25cm 以上では身体負担は比較的に小さいと感じられることが分かりました。また高齢者は、起立の準備として重心を立ち上がり位置(立ち上がる際の足の位置)の上に移動させる際に、膝を左右に開くことが分かりました。このため、高齢者の立ち上がりでは、開いた足が邪魔になり、体を支えるために床についていた手を同時に床から離すことができず、身体をひねり片手ずつ床から離すこととなります。この動作が、左右に重心が大きく動揺する一つの原因になっていると考えられます。

【商品化に向けて】

コンピュータマネキンと3次元動作解析技術を用いて、膝関節トルクを計算した結果、座面高さ5cmでの起立動作において膝に大きな負担が掛かること、座面高さを30cmにすることにより、座面高さ5cmと比較して、膝関節トルクが大幅に軽減できることが分かりました。

また、高齢者と若年者の立ち上がり動作が異なることもわかりました。開発前の設計の段階で、使用者の身体的な負担がシミュレーションできることは、ユニバーサルデザイン製品の効率よい設計や、使いやすい製品の開発に非常に有用です。開発した製品は商品化され、「ものづくりデザイン静岡 2002」でユニバーサル賞を受け、共用品白書 2003 ((財)共用品推進機構編著: ㈱ぎょうせい) に共用品として掲載されています。

■ユニバーサルデザイン家具の特徴を紹介します。

◇スッと座れて、サッと立てる！



○回転シート

肘掛&腰当て一体の座面だけが、左右に90度回転します。

☆90度回転するから椅子を動かさずにスッと立ち座りができます。

☆背もたれ固定だから安心してお使い頂けます。



◇「どっこいしょ」は、もうありません！



◇アップリフト機能

立ちあがる際に座面が(ガスダンパーの反発力で)お尻を押し上げてくれるのでサッと、楽に立ち上がれます。(座面の重荷を43~100Kgまで使用者の体重に合わせ、5段階に調節可能)

☆清潔

シートが丸洗い可能なので何かこぼしてしまった時でも安心です。いつでも清潔&綺麗な座面でご使用できます。(防火・防水仕様)

☆快適な座り心地

体の曲線に合わせて作られた座面により長時間座っていても疲れがたまりません。

アップリフト機能を解除して、普通の椅子として使用することも出来ますので、ご家族全員で使うことができます。





◇安心・安全

立ち上がり、座るときには背もたれを支えに。背もたれは動かないようになっているので、安心・安全です。



◇くつろぎ

シートを回転させて、背もたれによりかかり、長く座っても疲れにくい工夫がしてあります。木の温かみとともにくつろぎの時間を過ごせます。

■おわりに

- ・人々の真に豊かな生活の実現に役立つ。
- ・「お客様の立場になっているか」「お客様に喜ばれるか」を仕事の判断基準とする。
- ・明るく働き甲斐のある、品質を大切にする職場を想像する。
- ・健康な生活を提案し、限りある資源を無駄なく利用する。

以上の企業理念のもと、全社員がユニバーサルデザイン理念を共有し、安全・安心を追求したもののづくりに励んでまいります。

Case study: まちづくりプロジェクト

まちづくりプロジェクトの取組みについて

まちづくりプロジェクトでは、ユニバーサルデザイン視点によるあらたなまちづくりの提案を目指し活動を続けてきました。これまで行ってきた活動として、全国のまちづくり調査、それら事例を参考にまとめたUDまちづくりのヴィジョン、具体的な地域を対象にアプローチしたUD提案づくりをご紹介します。

まちづくり調査

どのようなまちづくりが理想なのかを調べるため、全国のまちづくりの事例の中から選択し、現地視察を行いました。まちづくりの多くは、住民の持つ危機的状況がきっかけとなっている場合が多く、またそのきっかけを土壌にまちづくりのテーマが掲げられています。これらテーマに通じる要素としては、絵になる顔、魅力があるということ、住民の総意としてわかりやすいなどがポイントになっています。またまちづくりのデザインは、テーマの具現手段として、テーマ内容とは非常に密接な関係にあると言え、まちづくりのテーマでは、歴史文化、自然、風土などに関わる内容がよく取り上げられており、より多くの共感を得ています。デザインにおいて、人中心ではなく自然を尊重するなか、過度なバリアフリーを施さず、うまく対応している例も見受けられました。



図1. UDまちづくりのポイント

UDまちづくりビジョン

調査したまちづくりの事例を整理し、UDまちづくりのビジョンとしてまとめました。“まちづくり”は、“ものづくり”とは違い、完成というゴールを目指すものではなく、まち自身を維持、継続、更に発展させていくという育成のプロセスが重要であると言えます。また“つくり手”だけでなく、つくる行為に“使い手”でもある住民の参画が、より優れたデザインをつくりあげています。このようにまちづくりでは、より多くの人々が賛成できるまちのテーマを掲げ、より多くの人々が参画・合意の取れるまちのしきみをつくり、より多くの人々にとって快適なまちのデザインをつくることで、誰もが愛着を持ち、誰もが満足するパートナーシップのまちづくりが実現できると考えています。

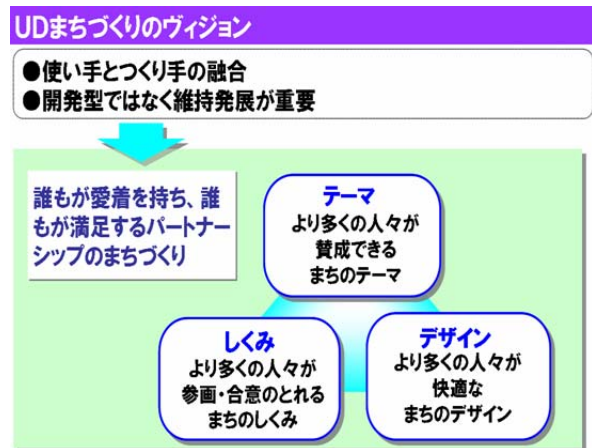


図2. UDまちづくりのビジョン

UDまちづくり提案づくりの試み

続いてまちづくりプロジェクトでは、これまでの経験を元にまちづくりを行っている地域を対象に、ユニヴァーサルデザインの視点での提案づくりを試みました。今回、川崎市二ヶ領用水宿河原堀を、比較的知名度がありながらもすでに顕在化している多くの問題点の解決が待たれる場所として取り上げ、我々なりの具体的な提案づくりを行いました。この場所は特に桜の季節には多くの人々が外部からも訪れ、賑わいを見せています。また自然の川に触れることができる親水空間を積極的に取り入れ、都市が失いつつあるものを残す試みがなされている場所としても貴重な存在です。このような場所に対し提案を行うことは、他の類似事例に対しても適用できるものであり、これらの積み重ねが、今後のまちづくり検討において、大切なデータになることを目指しています。



図3. 宿河原堀沿い桜並木

1. 提案のスタンスとフロー

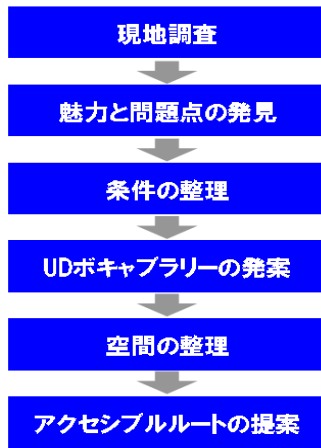


図4. 提案作成フロー

すでに川崎市二ヶ領用水宿河原堀では、地元住人の方々が中心となり「二ヶ領用水宿河原堀を中心としたまちづくり将来構想（案）」を提案されており、将来構想に向けての検討が行われていました。そこで、まちづくりプロジェクトでは、さらに新たな将来構想に向けての働きかけをするのではなく、すでにある将来構想をさらに強化することを目指し、ユニヴァーサルデザインの視点で、高齢者や障害者の利用及びそれらの人と健常者がともに楽しむことが出来るをテーマにアイデア出しに取り組みました。提案としてはガイドラインに近く、望ましい整備の指針になればと考えています。今回、提案づくりのフローでは、現地調査に始まり、最終、空間の整理とアクセシブルートの提案で、宿河原堀全体の魅力づくりを目指しています。

2. 現地調査及び問題点の発見

現地踏査により現況の確認を行い、問題点をあげまとめていきます。

- ・ 多くの親水空間に関する整備が見られるが、メンテナンスの不備により十分機能していない。
- ・ スロープ等のバリアフリー対策が見られるが、スポット的で回遊性に問題がある。
- ・ 親水デッキの端部等落下防止等の安全対策が不十分である。等々

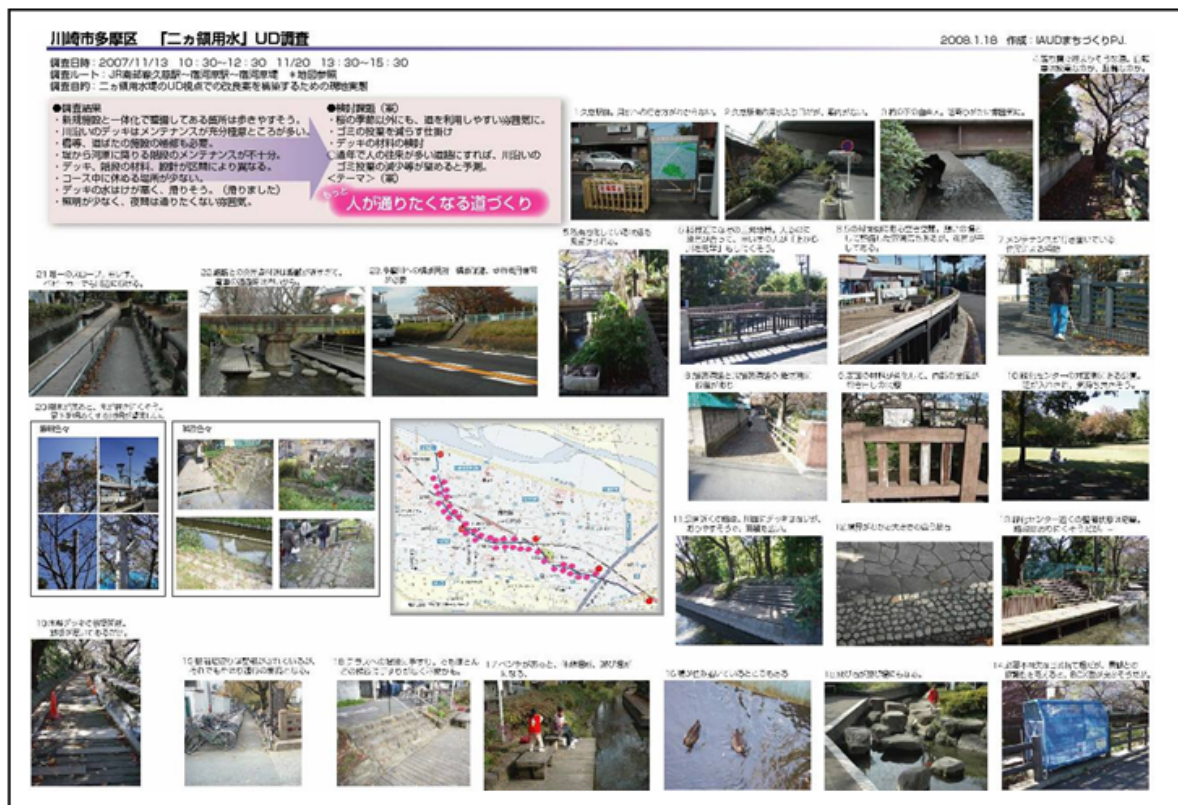


図5. 二ヶ領用水宿河原堀のUD調査

3. 条件の整理／UDボキャブラリー

利用の容易さ、近づきやすさ、安全性等を中心に、主な利用面からの条件整理を行い、抽出された項目ごとに、最低1つ以上のUDの視点から具体的解決策を提案し、それをUDボキャブラリーとしてストックします。例えば“親水”への解決策には、五感を活用したアイデアも盛り込むことで、対応の幅を広げています。このように出てきたアイデアをUDボキャブラリーとして蓄えることにより、宿河原堀の提案だけでなく、他のまちづくりでも参考にさせていただけると考えています。

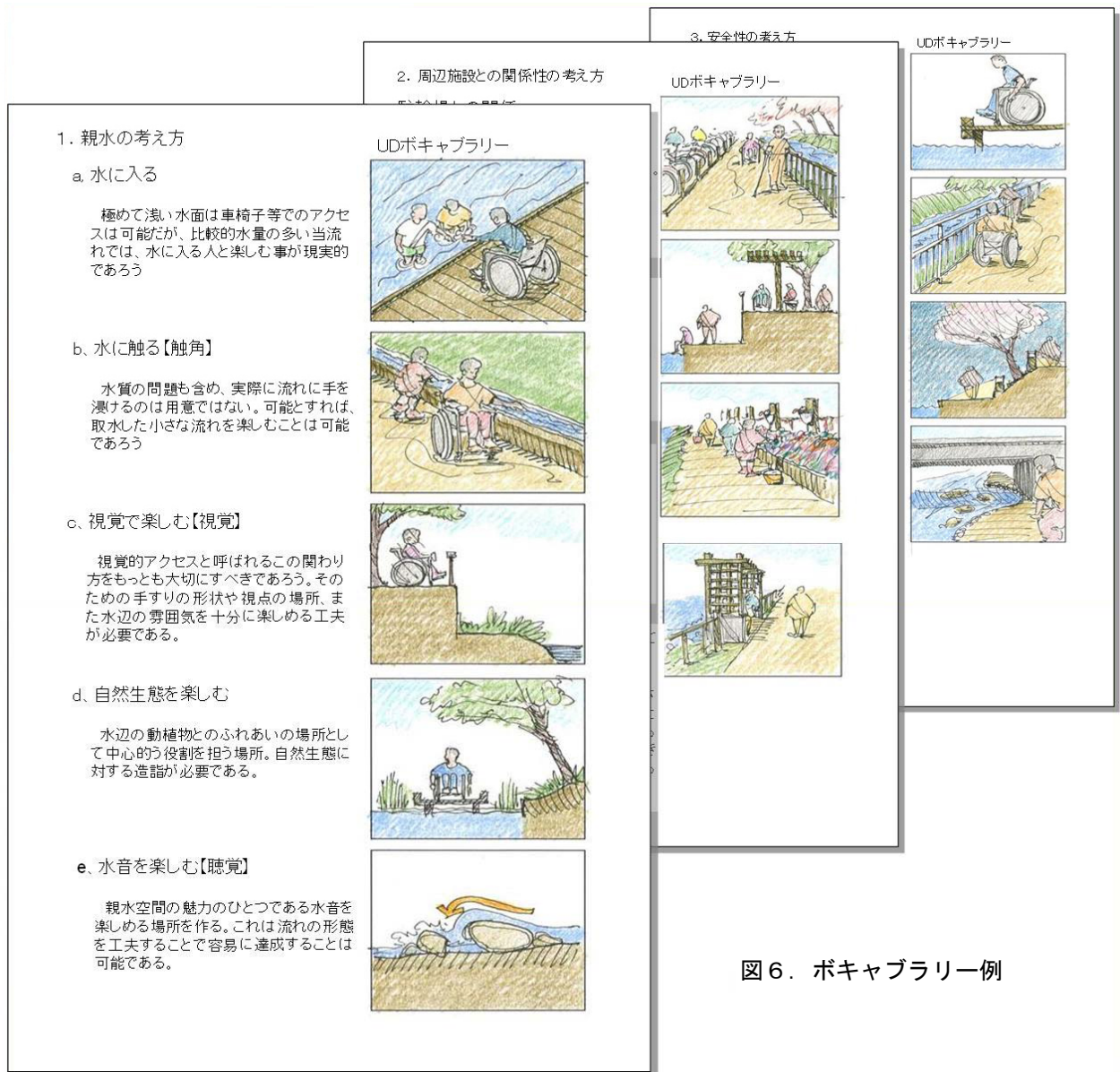


図6. ボキャブラリー例

5. 空間の整理

場所ごとの強化すべき利用形態を特定し、宿河原全体としての魅力作りを目指します。ここでは現況の利用形態、景観等より、宿河原堀を三つのゾーンに分けました。これはそれぞれのゾーンに対して魅力を付加することが比較的容易に行えると思われるゾーン分けであり、整備の目標とします。



図7. 宿河原堀ゾーン展開

6. アクセシブルルートの特定

UDの視点から、全ての人と一緒に楽しむことができ、UDボキャブラリーでリンクされたワンルートを特定し、比較的短期間での魅力アップを狙います。

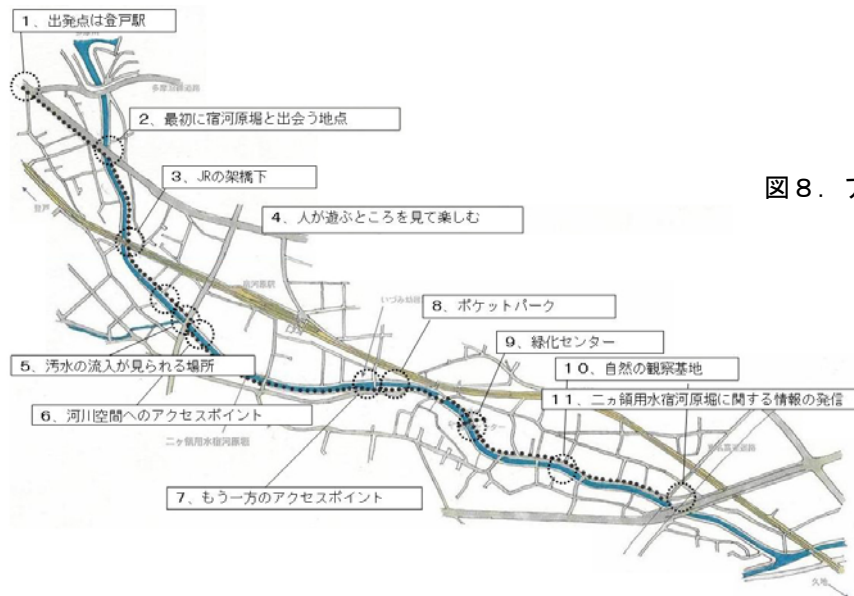


図8. アクセシブルルート

反省と今後の対応

今回、宿河原堀での提案づくりにおいては、活動時間の都合上、短期間に一連のプロセスを試行させることを優先させたため、本来UDまちづくりで重要な使い手（住民の方々）を交えての検討が充分に行えませんでした。今後は、住民の方々を巻き込んで、フィードバックをかけていくことで提案をまとめていきたいと考えています。

世界の UD 動向

■バルセロナ・デザイン・ウィーク参加報告

IAUD 専務理事 川原啓嗣



バルセロナの観光名所：グエル公園（ガウディ作）



会場のカイシャ・フォーラム

11月11日（月）～14日（金）の予定でバルセロナ市において開催されたバルセロナ・デザイン・ウィーク会場のカイシャ・フォーラムは1929年のバルセロナ万国博覧会が開かれたモンジュイックの丘にあり、元紡績工場の外観を保存、内部をリフォームして国際会議クラスのイベントが行える設備を持つ立派な施設として生まれ変わっている。道路を挟んだ向いはバルセロナ博のドイツ館（ミス・ファン・デル・ローエ作）がほぼそのままでの状態で保存されており、いわゆる「バルセロナ・チェア」のオリジナルも展示してあるなど、デザイン史研究者にとっては、外すことのできないスポットとなっている。



バルセロナ博覧会のドイツ・パビリオン



バルセロナ・チェア

14日の最終日は地元デザインフォーオール財団代表のフランチェスク・アラガイ氏をコーディネーターとしたセッション「Design and users: growing the market」として行なわれたが、聴衆は100名程度とやや少なめの印象を受けた。ただし、米国からスマートデザインのデザイナーや、ヒューレット・パッカードの関係者も参加するなど、聴衆の関心の度合いは概して高かったようだ。

最初の講演は、私の「Universal Design: Perspective from Japan」で、主に日本のユニバーサルデザインの現状を写真やムービーを交えながら解説した。スペインほかヨーロッパ各国では、「デザインフォーオール」や「インクルーシブデザイン」の言葉が主流であり、「ユニバーサルデザイン」には（強引に？）普遍化・標準化したデザインかのような誤解があると以前より感じていたので、講演の冒頭でそれぞれの言葉が発生した経緯を解説、コンセプトレベルにおいて違いはないと話すと、皆、安心したように大きく頷いていた。日本企業のさまざまな製品事例については、概ね驚きと感心の表情で見入っていたようだ。



会場の様子



フリーディスカッション

次に European Institute Design for All (EDAD) のドイツ代表でもあるノイマン・コンサルタツのピーター・ノイマン氏より、「The socioeconomic impact of Tourism for All: The German experience」と題して講演が行われた。氏はツーリズムの観点から主にドイツの現状を解説し、特にトイレの最新事例を紹介した。隣り合う二つのブース間の間仕切りが折り畳まれ、一つの大きなブースに変化したり、ブース内に設置された便器が電動で左右に自由に回転し車椅子からのアプローチを容易にする等、ダイナミックなデザインの公衆トイレが実現しており、日本の同様の公共施設では考えられないレベルに達していると感じた。

三番目はフランチェスク・アラガイ氏による、バルセロナ市やカタルーニャ自治区における、主に都市環境の UD 化に関する事例報告が写真やムービーで紹介された。バルセロナは観光産業で成り立っている都市であり、横断歩道のカーブカットや点字ブロックタイルの敷設、及びトラムや乗合いバスの UD 化など観光客をバルセロナに招くための施策を推進しているとの報告がなされた。

最後に、三者をパネリストとして会場からの質問も交えながらフリーディスカッションが行われた。2006 年の京都でも講演し、UD が進んだ日本の現状を目の当たりにしたアラガイ氏は、帰国後、バルセロナはまだ遅れていると各地の行政関係者を力説して回ったそうだが、観光客へのインフォメーションという意味では、バルセロナよりもドイツは遅れていると述べた。サイン表示等、ほとんどがドイツ語のみで英語も併記されていないとのこと。ノイマン氏も沈黙していたので、どうやら事実のようだ。代わって、ノイマン氏からは、温水洗浄便座をヨーロッパ、特にフランスやイタリアで積極的に販売すべきとの熱心な提言がなされた。バスルームのトイレに温水洗浄便座を設置すれば、ビデが不必要となるため、取り外して車椅子等のアクセスが可能なスペースを作りだすなど活用できると力説した。基本的にヨーロッパの都市は歴史的建築物が多く、外観を変えたり、部屋の面積を広げたりすることが困難なため、この種の機器は有効なのだという。

聴衆からは、細かくて読めないパッケージの表示を改善するにはどうしたらよいか、コンピュータ等、操作が複雑な機器を高齢者にも使いやすくするには、などの質問が寄せられた。洋の

東西を問わず、我々は同様の問題に直面しているとの印象を持った。



横断歩道のカーブカット



公共貸し自転車コーナー

講演終了後、アラガイ氏が言うには、最近のバルセロナの街の大きな変化は、自転車が急増したことだとのこと。都市化により年々、交通量も多くなり、交通渋滞も慢性化したため、バルセロナ市が市内の各所に公共貸し自転車コーナーを設置し、安価な料金で利用可能としたそう。確かに至るところに設置されており、専用の IC カードをコントロールパネルにかざして、自転車のロックを開閉する仕組みになっている。自由に乗り捨て、乗り換え可能なため、市民が頻繁に利用している様子が見える。郊外から電車やバスなどの公共交通機関を利用して市内に入り、市内ではできる限り自転車を活用してほしいとの策は、かなり市民にも支持されているようだ。

何をもってユニヴァーサルデザインというのか、文化的背景も異なるヨーロッパの空の下から遠い日本を思いつつ、いろいろと考えさせられる日々だった。

※前回 2006 年 3 月の講演におけるレポートも併せてご参照いただければ幸いです。

→ <http://www.iaud.net/dayori-f/archives/0605/10-122030.php>

■しずおかユニバーサルデザイン国際シンポジウム 速報

情報交流センター 蔦谷邦夫

去る11月13・14日、静岡文化芸術大学において『暮らしのリ・デザイン』をテーマに静岡県と静岡文化芸術大学が共催、IAUD後援により「しずおかユニバーサルデザイン国際シンポジウム」が開催されました。静岡県が1999年（平成11年）にUDに取り組み始め、今年で10年という節目の年を迎えるにあたり企画されたもので、評論家の大宅映子氏やメイスユニバーサルデザイン研究所のレスリー・ヤング氏をはじめ各分野の第一線で活躍する専門家の方々が参加し、講演やさまざまな事例紹介、分科会、視察調査などが行われました。

後援者の一員として初日13日のプログラムに参加してきました。主催者からは後日、正式な報告書がまとめられるものと思われませんが、簡単に概要をお伝えします。

ゆったりとしたキャンパスを抜け敷地載のほぼ中央に今回のシンポジウムのメイン会場となった約600名を収容できる大講堂がありました。行動の室内は茶系の落ち着いた雰囲気、立派な施設で、手前のロビーでは、大学でのUD関連の研究成果や地元企業、静岡県内の自治体のUD取り組み紹介などの展示があり、それと並んでIAUDの活動紹介パネルが展示されていました。

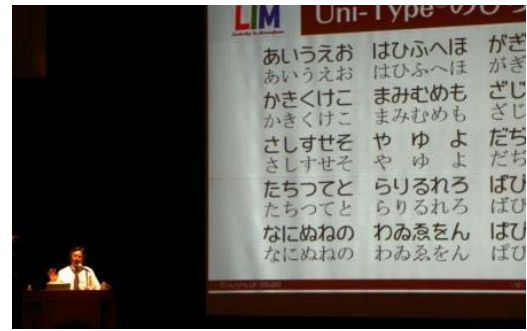


シンポジウムがスタートし石川嘉延静岡県知事の開会のあいさつでは、これまでのUDへの取り組み経緯や2010年の国際会議開催に向けての推進方針などが語られました。

続いての大宅映子氏による基調講演では「誰のためのデザインか」と題し、これまでの日本の政治の流れを背景として、今、国のリ・デザインが必要になっていること、世界のリ・デザインということでオバマ次期大統領への期待と危惧が述べられた。また、環境問題についてはペットボトルのキャップ集めを例に、小さな対策をやらないと非国民のようになれるが、大きな根っこのところ、ライフスタイル自体を変えなければいけない。ユニバーサルデザイン＝世界共通のデザインという視点で、信号、トイレのサイン、新幹線のひじ掛けのコンセント、シャワーの操作方法などを例に、デザイナーの独りよがりではなく、人間の行動学のようなところから考えられないのかという指摘と提言があった。その他にも身のまわりのものに目を向け、今後の課題としてUD、バリアフリー、共用品、アクセシブルデザインなどの言葉の統一の問題や、普通の人の共感を得るための分かりやすさ、知らしめる努力の必要性などが語られた。最後はシルバーシートを引き合いに、普通の席に座った人が譲らなくてもいいと思うようになったら困る、本来は自然に思いやる優しい心が大事、それがユニバーサルデザインだと、心の重要性で話を締めくくられました。



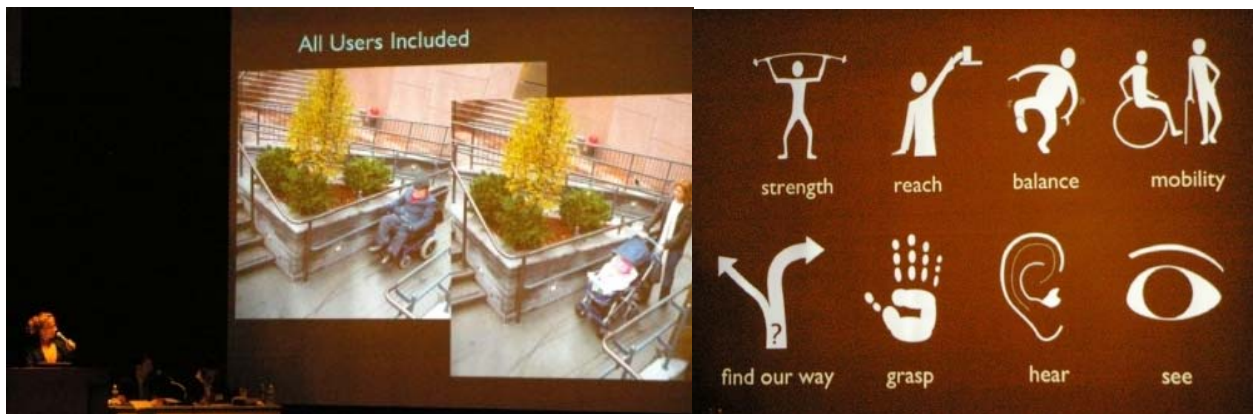
続いての事例発表では地元企業の産学共同の成果ということで株式会社リムコーポレーション代表取締役の竹塚直久氏から「視認性、可読性に優れたデジタルフォントの開発」について報告が行われました。千葉大学の宮崎紀朗グランドフェロー（同大元教授）との共同研究によるもので、携帯電話など小型の液晶ディスプレイでの視認性に優れたフォントが紹介されました。



午後の部に入り、最初のプログラムは古瀬敏静岡文化芸術大学教授のコーディネートにより「暮らしを快適にするデザイン・力」というパネルトークが行われました。パネリストは吉村等氏（スズキ株式会社）、田中眞二氏（積水ハウス株式会社）、奥田直磯氏（富山ライトレール株式会社）の3氏。



続いては今回シンポジウムの大きな目玉の一つでもあるメイスユニバーサルデザイン研究所のレスリー・ヤング氏による記念講演が行われました。「ユニバーサルデザインの到達点と今後」と題し、25年前にUDを提唱し研究所を創始したロン・メイス氏の紹介を皮切りに、例えば法的基準により多くの人にとって使いやすいものもできてきたが、体力や認知能力の衰えなど時の経過とともに法的基準だけではカバーできないところもたくさんあることが指摘されました。



さらに、UDの7原則開発されてから10年が経過し、カナダでは就労年齢に達している障害者の可処分所得の総額が250億カナダドル（日本円で約1兆9千億円）に達していることや、UDにより購買力を上げた事例が紹介されました。

米国での事例として、補聴器用ボタン電池のパッケージ、タッパーウェアのリデザイン、オフィスやホテル向け家具、在宅介護用機器、キッチン用品、両手で使えるハサミ、ガーデニング用品、荷物の積み下ろしが楽な自動車、死角の生じない車のサイドミラーや距離センサー、定量をワンアクションで測れる洗剤パッケージ、機能がシンプルで使いやすい携帯電話、ビンの自動ふた開け器などが紹介されました。



次に行われたレスリー・ヤング氏と今回のシンポジウムの会場側の責任者としても準備にあたられた河原林桂一郎静岡文化芸術大学デザイン学部長の UD 対談では、米国における産学共同の状況や UD の今後についてのテーマが掲げられましたが、残念ながら十分な時間がとれず、若干消化不良なまま終了したという印象でした。

初日のプログラムはこれで終了し、その後シンポジウムの参加者を中心として行われた交流会では、静岡県や浜松市、大学関係者の方々と会話するなかから 2010 年の国際会議開催に向けた意気込みが強く感じられました。



なお、翌日 14 日（金）のプログラムについてはスケジュールの都合で参加できませんでしたが、地元企業、自治体、大学を中心とした 2 つの分科会、会場となった静岡文化芸術大学の学内施設の視察が実施されました。

以上

■第3回サステナブルデザイン国際会議 2008 Destination2024のお知らせ

来る、12月7・8・9日の3日間にわたり第3回目となる、サステナブルデザイン国際会議を開催します。「サステナブルな社会に向けてデザインの舵を切る」のテーマのもと、デザインはいかにサステナブルな社会実現に向け行動すべきなのかを考えます。

デザイン専門職能、また、個人の価値観ともつながる、興味深い講演になることと思います。皆さまのご参加をお待ちしております。

◎お申し込み、詳細は下記ホームページから

<http://www.openhouse.co.jp/EDI/destination2024/>

【会期】2008年12月7日（日）・8日（月）・9日（火）、[12日（金）特別シンポジウム]

【会場】港区立エコプラザ 東京都港区浜松町1-13-1 www.eco-plaza.net

【定員】100名

【参加費】◎7+8+9日[+12日]通しての参加費： 一般20,000円 学生12,000円

*含：会議参加費 会期中食事代（7日夕[交流会]、8・9日昼）、
特別シンポジウム（12月12日開催/東京ビッグサイト）ご招待

◎7日基調講演会のみ参加費： 3000円（一般、学生とも）

◎12日特別シンポジウムのみ参加費： 一般5,000円 学生2,500円

【プログラム】

==1日目：12月7日（日）13:00～17:30：基調講演会 日/英、同時通訳==

*基調講演「アクティビストとしての生き方」

星川 淳氏（作家、翻訳家、グリーンピース・ジャパン 事務局長）

*講演1「考えるか泳ぐか！-記憶のデザイン」

トム・ジョンソン氏（建築家、国際デザイン・リソース・アワード主宰）

*講演2「SustainAble」

エアリス・シュリン氏（グラフィックデザイナー、セント・ジョンズ大学グラフィックデザイン助教授）

*講演3：社会「Regional Roots - 地域性とそのルーツ」

ラッセル・ケネディ氏（モナシュ大学上級講師、Icograda 次期会長）

==2日目：12月8日（月）10:00～19:00：下記テーマにて分科会を実施==

*企業内デザイン育成

「企業内におけるデザイン教育とデザイン・イニシアチブの活動をする事」

*職能のモラル「サステナビリティはデザインのモラルをどう変えるか？」

*地域と国際性「リージョナル・ルーツをうけて」

*CSR「企業の社会的責任とデザインの役割」

*デザインの専門教育「デザインで学び問うこと」

*消費とスピード「日本の消費文化を再考する」

*サステナブル・コンサンプション

「消費者立場で考える、サステナブルな“消費”とは？」

*社会起業「デザインにかかわる社会起業家と一次産業」

*コミュニティ「お金に使われない社会」

==3日目：12月9日（火）10:00～16:30：統括会議==

*提言：各分科会からの報告、発表、提案

*クロージングディスカッション

*「サステナブルデザイン行動宣言」採択

==[特別シンポジウム] 12月12日（金）：10:00～12:30 東京ビッグサイト==

*基調講演「グローバリズムの光と影」

星川 淳（作家、翻訳家、グリーンピース・ジャパン事務局長）

*対談 星川 淳 + 山本良一（東京大学生産技術研究所教授）

【事務局】 サステナブルデザイン国際会議事務局（LLP エコデザイン研究所内）
〒105-0013 東京都港区浜松町 1-22-8
www.ecodesigninstitute.com
tel : 03-6826-1511 fax : 03-3578-1459
mail@ecodesigninstitute.com

■ IFA e-ニュース 2008年9月号

IFA 第10回高齢化に関する世界会議開催のお知らせ
2010年5月2-6日 オーストラリア・メルボルンにて

第10回高齢化に関する世界会議「いま変化する時 — 将来の高齢化にむけて」を2010年5月2-6日、ヴィクトリア州高齢者会議（COTA, Vic）の主催により開催いたします。

プログラム（仮）の大枠は以下3テーマで構成されます。

- ・人口統計学的状況からみた好機と課題
- ・世界温暖化と環境
- ・インクルーシブ・リーダーシップ

これらのテーマが新たな会話を促し、従来の主題領域を深く探求するのに役立つと期待されます。各議題については、高齢者のための国連原則、高齢化に関するマドリード国際行動計画およびWHOのアクティブ・エイジングに関する枠組みなど国際的・地域的な枠組みの中から情報提供されます。本会議は、上記およびその他重要な課題についてのグローバルな情報交換を行うため信頼できる場を提供し、高齢者に対する建設的な社会変革を生み出す接点としての役割を果たします。壮麗で由緒あるオーストラリア文化をもつメルボルン市は、IFA国際会議の10年の節目を記念するため完璧な環境を用意します。IFAとCOTA, Vicは会議を有益で特別なものとするをお約束いたします。世界の高齢化に関する知識、経験やその解法を分かち合い共に研究するため、経歴や専門分野の違う方々の参加をお待ちしております。詳細については会議のウェブサイト www.ifa2010.org をご参照ください。

IFA 第9回高齢化に関する世界会議の報告

IFAは情報共有と知識移転の機会を提供するため全力を傾けています。第9回会議参加者の皆さまの論文を電子出版するためデータを送付いただきますようご案内いたします。論文や発表原稿は完璧に保存するためPDFに変換します。掲載ご希望の方はMr. Stephen Charters アドレス scharters@ifa-fiv.org に送付ください。

下記内容を掲載予定です。

- ・ IFA 第10回高齢化に関する世界会議のご案内
- ・ 会議後の知識共有
- ・ 2008年 IFA 会長賞
- ・ 2008年役員会議—報告書あり
- ・ 国際高齢者の日—10月1日
- ・ 高齢化に関する第2回世界集会の検証
- ・ 英国における人権事情
- ・ IFA 理事 Elizabeth Mestheneos 氏プロフィール
- ・ HelpAge International 地域会議
- ・ 公平な健康に関する活動—WHO の最新報告
- ・ あらゆる年齢層へのアルバニア社会の取り組み（ASAA）

■労働環境プロジェクト新規メンバー募集について

IAUD労働環境プロジェクトでは新たなメンバーを募集しています。

労働環境プロジェクトは、さまざまな特性を持つすべての人が気持ち良く働くことのできる未来オフィスの労働環境を実現することを目指して活動し2007年度までは、数多くの課題の中、特に会議のユニヴァーサルデザイン（UD）に焦点をあてて活動してきました。その成果である「会議のUD」は、IAUD会員サイトUDの部屋で公開されています。

2008年度から認証システムのUDに焦点をあてて活動しております。特に、昨今注目されているセキュリティの問題やその利便性から多様なシーンで活用されている、ICカードによる認証システムの使い勝手や運用について新たに提言することを目標にしております。

労働環境において、入退出管理に限らず、パソコンのログインやコピー機の利用、さらには社員食堂での支払い手段としても、ICカードによる認証が取り入れられています。しかし、一見便利なこのシステムにおいても、さまざまなユーザーの立場に立って考えてみると、不便に感じることや改善すべきことなど、まだまだ課題が存在することがわかりました。

今回の新規メンバー募集によって、これまで以上に幅広い分野からの視点を集め、認証システムのUD化を目指します。ぜひこのプロジェクトへの参加協力をお願いします。特にIT関連企業の方にご参加いただきたく、お願い申し上げます。

労働環境プロジェクト 主査
室井哲也

なお、ご質問及びお申込は事務局までお願いいたします。

<発行日変更のお知らせ>

次号は12・1月合併号、1月初めの発行になります！

本誌は今年4月にスタートし、毎月末に発行することで続けてきましたが、読者の方より、月末にその月の号がでるのは一般的な雑誌と比べておかしい、というご意見をいただきました。情報交流センター内で検討し、事務局とも相談した結果、次号から月初めの発行に変更することにいたしました。

切り替え時期は、すでに予定していた特集記事や編集作業の都合などにより、年末・年始をはさむ次号が良いだろうということで、次号は12月と1月の合併号とさせていただきます。一同さらに一層、内容の充実に努めてまいりますので、今後とも引き続きましてご愛読いただきますよう、よろしくお願いいたします。

【編集後記】○今月号の「特集：生活者の視点で考える」は4月に準会員となった、AJU 自立の家へお伺いしました。2月のUD大会が名古屋で開催されることが決まっていたので、もしや円滑に繋がればとの思いもあったのですが、普及事業委員会副委員長の大島理事(トヨタ紡織)ほか東海地区の会員の方々の熱心な努力が功を奏し、期待以上のフォーメーションが形成されつつあるようで嬉しく思います。展示会には総裁もたいへん興味を示されている様子ですので、皆様こそ出展いただきたく。金融不況の影響で経済活動が萎縮しがちですが、逆にUDにとっては千載一遇のチャンスと捉え、禍を転じて福と為したいものです。(K)

○本誌の編集に本格的に携わって2カ月少しになりますが、やっと全体の流れをつかみかけてきたものの、IAUD 会員の皆さんとのコミュニケーションのためのメディアという命題を考えると、その難しさ・大変さに頭を悩ますばかりです。また、最初は何とか形にすることで目一杯だったのですが、会員の皆さんが本誌を読んで、どのように感じていらっしゃるのかという反応が、次第に気になってきました。面白いのかそうでもないのか、役にたっているのかどうか、厳しいご意見ご感想も含め、どんな小さなことでも構わないのでぜひ、情報交流センターまでお聞かせください。覚悟しつつ楽しみにお待ちしておりますので、よろしくお願いいたします。(蔦谷)

IAUD Newsletter では、誌面を会員の皆さまのUDに関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業のUD商品開発事例やPJ/WGの活動成果事例等の情報をお寄せください。また、国内外のUD関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。ご連絡は、news@iaud.netへ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter No.8

2008年12月2日発行

国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局 : 225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110

電話: 045-901-8420 FAX: 045-901-8417

e-mail: info@iaud.net

情報交流センター: 104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9

(IAUD サロン)

トヨタ八丁堀ビル 4階

電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847

e-mail: salon@iaud.net